

高雄地区 歴史文化の視点 1

19. 高瀬舟と赤穂鉄道

【ストーリー】

市内を南北に貫流する千種川には、かつて舟運が発達し、高瀬舟による南北流通が活発に行われていた。「木津」は、文字通り大工村へ運び込むための「木の津（港）」であり、木津・段ノ上遺跡では、中世の輸入陶磁が出土するなど、河口に立地する港のような性格をもっていたようだ。

高雄地区では、かつての波止は失われているが、旧赤穂上水道の木津取水井堰跡には、高瀬舟通路として使われた堤の名残を見ることができる。

高瀬舟による舟運は、大正 10（1921）年に敷設された、軽便鉄道の赤穂鉄道による陸運によってその役目を終えた。赤穂鉄道の軌道跡の多くは市に寄付されて現在は道路となっており、根木鉄橋の基礎が現在も残るほか、周世から富原そして北の有年地区に抜ける道は、現在も鉄道路線の景観、雰囲気をもそのままに残している。

このように、高雄地区には現在も舟運や陸運の景観、名残がみられ、今にその歴史を伝えている。



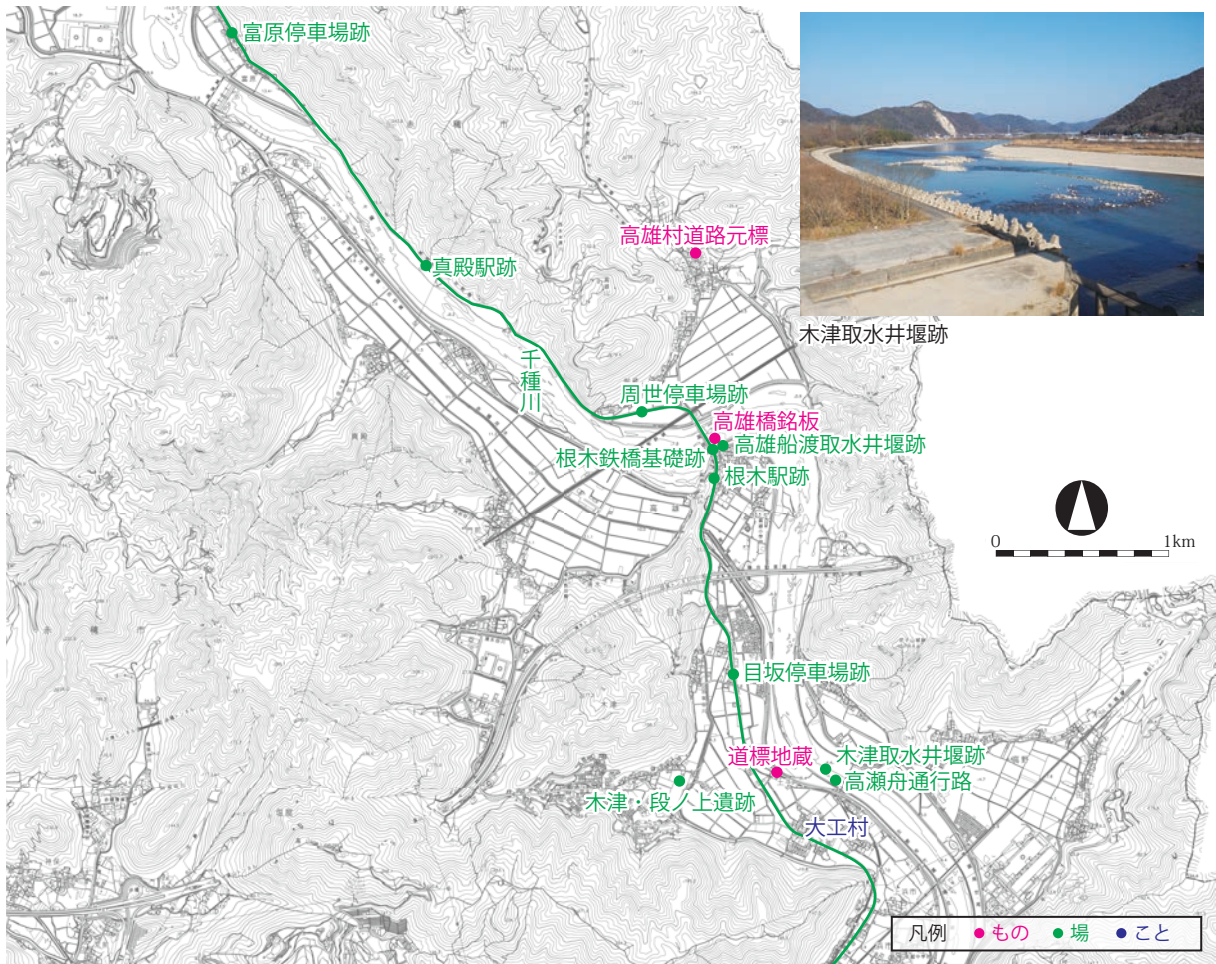
千種川



赤穂鉄道真殿駅跡



根木鉄橋基礎跡



木津取水井堰跡